

お豆腐メンタルのアイ  
ドルマスターインデレ  
ラガールズ

冬月雪乃

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ガチめなメンヘラちゃんのアイドルマスターインデレラガールズ。

重たいしキツいし見るに耐えない描写がたくさんあります。

半分くらい供養のつもりなので、反響次第で続けるか決めます。

# 目 次

序章	お豆腐メンタルさん	—	—	—
一話目	灰被りの魔法使い	—	—	—
二話目	変わるために	—	—	—
三話目	魔境です。	—	—	—
四話目	挨拶と太陽とホラー	—	—	—

33 24 10 5 1



# 序章 お豆腐メンタルさん

——私は、夢を見る。

生まれて、持て囃されて、失墜して、転落して、この世の地獄を味わつて、諦める。それだけの、三十数年間に渡る誰かの人生を追体験するだけの夢だ。けれどそれは齡二桁にもならない私の精神に強い影響を及ぼした。

それはそれだろう。

本来なら未だ強すぎる惡意からは守られているはずの年頃。

それを突如として逃げられない場所から地獄のような惡意をまざまざと見せ付けられるのだ。

結果、私は一週間意識を失い、その間も見知らぬ男の地獄を見続けた。目覚めた私は人が変わったようになつた。

活発だった性格は暗く、表情のよく変わる顔は鉄面皮に。

両親は心配こそしたものの、どうにも出来ないと匙を投げられた娘相手にオロオロとするだけだった。

——いや、それは失礼だ。彼らは良く寄り添つてくれた。

泣いて飛び起きる私を抱きしめてくれたし、添い寝してくれた。頭を撫でてくれたし、テストで良い点を取つたら褒めてもくれた。悪い事をしたら叱られたり、遊びにも連れて行つてくれた。

それらに癒され、愛を感じていた。

だが、見知らぬ記憶はその裏で私を蝕んでいた。

何しろ夢の世界とは時間の概念が無茶苦茶だ。

わずかでも眠れば三十年余をもする地獄の記憶を叩きつけられる。十五になる頃には不眠症になつた。

——そして、悪意の襲撃とは何も夢の世界だけでは無かつた。

何百何千と繰り返された地獄の記憶は、ついでに私の学力まで上げていた。すなわち、常に学年トップ。

そして自分で言うのもなんだが、私の容姿は良い方だ。

可愛くて成績がいい根暗。

イジメられるには格好の餌だった。

小学校はほぼ不登校だつたし、中学では主だつたイジメグループが別に行つたから通

うことになつたが、イジメはすぐに私に襲いかかつた。

主には女子グループからだつた。

一年を耐え、二年を耐え、三年目。

私の目はすっかり死んだ魚のようになつていた。

そんなある日だ。

呼び出されて向かつた旧校舎、そこで私は襲われかけた。

肩を押され、床に叩きつけられる。

そのまま乱暴に服を引っ張られ——

「——ガツ!?」

驚くほどスマーズに足が出た。  
丸出された股間に膝を入れたのだ。

柔らかな、しかし確かなものを腹に押し込むように入つた膝蹴りはやつた私ですら思わず同情する程——膝の感触だが、ブチつとした。『パン』ではないだけ良いと思つてほしい。——のたうち回り、啞然とする面々を尻目に旧校舎から出て行つた。

この後私が無意識に上げていた悲鳴を聞きつけた先生方は何が起つたのかを把握したらしく、大問題となつた。

被害者である私は受験に問題ないようになると言つていたが、それよりも気になつたのは両親だつた。

怒髪天を衝くとはこの事なのだろう。

夫婦揃つて容赦の力ケラもなく、検事と弁護士の組み合わせには学校も加害者側もタジタジで——後々聞いた話だが、名刺を出した瞬間ノックアウト状態だつたらしい——加害者側はほぼ全員が転校。

残つた奴も進学出来ない程のダメージになつた。まあ、余罪ぼろぼろだし。録音機は便利だ。担任教師は真つ青だつたが。

まあそんなこんなでメンヘラを加速させつつ、両親の意向もあり、私は東京の高校生になつた。

# 一話目 灰被りの魔法使い

本日は晴天なり。

心は曇つてゐるけど。

そんなどうでもいい独白を溢しながら支度を済ませる。

机に並んだ市販薬と、カツターのうちいくつかをポーチに放り込み、それも通学鞄に。睡眠時間は一時間もない。

やつていたことは自分の勉強も兼ねた次のテストの範囲を簡単に解説するノート作りだ。

友達——というか超絶陽キヤのアイドルが同級生であり、彼女の依頼によつて作られている。

基本的に寝たくない私としては実益も兼ねた趣味となつていたし、誰かの役に立つのは嫌いじゃない。

「さて、行きますか」

#

学校に着くと、既にアイドルの友達——本田さんは談笑しており、私の姿を確認する

や、満面の笑みを浮かべて駆け寄ってきた。

「おはよう夢見！」

「おはようございます本田さん。こちら例のブツです」

「未央でいーのに……ってすごい怪しい!?」

「怪しいとは失礼な」

渡そうとしたノート——の入ったかばんをそのまま引っ込める。  
ああつ、とか言つてるが知らない。

「……」

「どうしました？ 私の顔が可愛いのは知つてますが」

「いや可愛いけど！ 可愛いけど自分で言うんだ！」

「否定しても私が可愛い事は変わりませんからね」

「実際可愛いから許される言葉だよねそれ」

そんなことは無いけれど。

口には出さず、しかし笑みで返して会話を終わらせる。

とりあえず渡すのはノートだ。

わーいとよろこぶ本田さんの横をすり抜け、席に。

座り、授業道具を机に。

外は晴天。

日差しは眩しく、蝉の声がよく聞こえ始め、草の香る風が少しの涼しさを与えてくれた。

冷房は授業中のみである。

財源が税金といえ、少し不便ではあるなあ。

始まるホームルームを聞きつつ、そんな益体のない考えを巡らせて遊ぶことにした。

#

放課後。

私は本田さんに呼ばれて玄関で待つていた。

一緒に帰りたいらしい。

「待つたー？」

「いえ。ところで校門付近に不審者が居るそうなのですが、裏からですか？」

不審者？ と校門を遠目から眺め、あつ、と小さな声をあげて苦笑い。

「知り合いでですか？」

「うう……プロデューサーだ……あれほど来ないでって言つたのに……」

ちよつと行つてくる。と本田さんは駆け出し、教師たちに囲まれてわたわたしている男性の元に。

しばらくすると教師たちは解散。どうやら誤解は解けたようだ。

「夢見ー！ プロデューサーが送つてくれるつてー！」

満面の笑みで駆け寄ってきた本田さんは開口一番そんなことを言つた。

「良いのですか？」

「うん！ いつもお世話になつてる御礼！」

「分かりました。そういうことなら」

男性に近寄る。

体格は良く、がっしりとしていて高身長。

強面ではあるものの、気弱さを少し感じる男性だ。

その瞳には強い芯が見える。

「いつも本田さんがお世話になつてるみたいですね。美城プロの武内です」

「はあ、ご丁寧に……。私は篠原夢見です。今日はよろしくお願ひします」

差し出された名刺を思わず受け取り、さらに自分の、と動きかけてそんなものはないことに気付く。

武内さんは怪訝な顔をしたものの、掘り下げては来なかつた。

「ところでアイドルに興味はありますか？」

「今のところはあまり」

そうですかと残念そうな武内さん。

本田さんは車の中、後部座席の整理をしている。

「まあ、もし自分を変える手伝いをさせてくれるなら、いつでもいいから連絡してください」

「はあ……」

リスカしてるアイドルとか問答無用でアウトでは。とは口にしなかった。

視線が既に左袖口に向いていたし、多分気付いているから。

## 二話目 変わるために

深夜。

うつかり寝てしまつた私は相も変わらず飛び起きた。  
生の実感。私はここにいて、私は私なのだと自覚するための自傷に及び、後始末をし、  
虚無感に襲われて背もたれに体重をかける。

ひっくり返つて強かに頭を打ち付けた。

痛い、と呻きながら起き上がり、視線は自然と机の上に。

見つめる先には名刺。

(株) 美城プロダクション

芸能部門 アイドル課 主任プロデューサー

武内 誠

そう銘打たれた立派な名刺だ。

軽く調べてみると、プロデューサーはこの武内さん以外いないらしく、業務調整から  
ケアまで、全て一人でこなしている超人だとか言われていた。  
実際凄い。

「……もし、全て正直に言つて、ダメならそれで良いか」

私は自分で分かるくらい限界が近い。

むしろ今までよく耐えた方だと思う。

薬の濫用。自傷行為。

次はなんだろうか。援助交際か？ 笑えない。

あんな、下らない記憶如きに私の人生をめちゃくちゃにされてなるものか。

怒りの炎が身を焦がす。

そしてその湧き上がった衝動のままに、

「——もしもし。夜分遅くに申し訳ありません。私、夕方に名刺を頂いた篠原夢見ですが……ええ、はい。送つていただいてありがとうございます。決心、というか、心が決まつたので、そのうちに、と。はい。ご迷惑をおかけします。はい。えつ、そこまで早く動いて頂けるのですか？ 恐縮です。では明日の夕方に。はい。本田さんに案内してもらおうかと思つていますが——はい。分かりました」

私は、ここから変わつてみせる。

ダメで元々。むしろ色々と不利だ。傷とか。

限界は近いが——絶対に負けない。

#

次の日。

私は本田さんを待っていた。

校門で待つてると武内さんを介して伝えてもらつている筈なので、そろそろくるはずなのだが——。

「夢見！ 待つた？」

「いえ。大丈夫ですよ。それより、今日はお願ひします」

頭を下げる。

本田さんは慌てたように、

「わわわわ、別にいーつこれくらい！ いやー、まさか私の知らないところでスカウトされてるとは思わなかつたけど、夢見なら大丈夫でしょ！」

「なんです、その根拠のない——」

反論しようか、と思つたが辞めた。

本田さんはすごく嬉しそうだし、水を差すのもどうかと思つたのだ。

本田さんは先導しつつも、様々なことを私に教えてくれた。

それは仲間の事だつたり、レッスンだつたり。

現場の雰囲気を軽く伝えてくれたし、厳しい面もある世界だとも。

そうして相槌を打つていると、本田さんは一つの建物を前に止まつた。

「ここだよ」

見た目は普通のビルだ。

だが、その異様さは入っているテナントである。  
上から下まで。全て美城系列でまとめてある。

「行こう？」

「はい」

ちょっとびり——いや、強がるまい。

すごく緊張しながらビルの中に入つていく。

何かが変わる予感を、胸に秘めながら。

#

「こんにちは。今日は来てもらつてありがとうございます」

「いえ、昨日はむしろすいませんでした」

「大丈夫ですよ。仕事していましたから」

ちなみに電話をかけたのは深夜一時である。

「さて、それでは——」

「その前に、私、自傷していますが、大丈夫なんですか？」

はつきりと言い切った。

武内さんは目を見開いて驚いているが、私が左手首の包帯を見せると、瞑目した。

——ダメか。

「ええ。大丈夫です」

武内さんの言葉は予想外だった。

「何があったのかはわかりません。が、貴女はそれを悔いていて、出来れば辞めたい。しかしそのきっかけがない。あるいは辞められない」

「ええ」

「本田さんといふときに浮かべていた笑顔は素敵でした。あの笑顔が出来るあなたなら、きっと大丈夫です。傷は……衣装などで隠していけばなんとかなるかと。水着などの場合にはテープやファンデーションの類を駆使しますよう」

「凄い、自信ですね」

「——様々なアイドルを、人を見てきましたから」

私は年甲斐もなく、そして私らしくもなく高揚していた。

別に、アイドルに憧れていたわけではない。

ただ、この人なら私をきっと導いてくれる。そんな強い予感がしていたからだ。

「あと、私と約束して欲しいのですが」

「大丈夫です。どうしても耐えられない場合を除いて、自傷行為は控えます」

「……すいません」

「いえ。やつと頂いたきつかけなんです。無駄にはしません」

「もし、耐え切れない場合、私や、仲間を頼つて下さい。耐えられない理由は言わなくてもいいです。雑談でもして、気を紛らわせたりは出来るでしょう」

「——、あ……」

その言葉は衝撃だつた。

誰かを頼る。言わなくていい。

私にはなくて、いいや、無意識に避けていた選択肢だからだ。

なぜかは分からない。

けれど、迷惑をかけたらならない。やつてはいけない。そう勝手に禁忌に思つていたことだつた。

「私たちは共に歩む仲間です。あなたが転んだなら、手を差し伸べるくらいのことはしたいのです」

「——、はい。ありがとうございます」

なんで、こんな事に気付かなかつたのか。

分かつてゐる。夢だから、正直に言つても信じてもらえないから。  
だけど、違う。

言わなくともいい。

頼つていい。

ああ、なら、私も、

「私も、出来る限り、頑張ります」

「ええ。しかし、無理はしないで下さい。それでは、こちら書類です。ご両親の承諾が必要なものもありますので、サインと捺印をいただきましたら郵送でも構いませんのでお願いします。封筒も一緒に渡しますね。あ、それぞれ一枚入っています。一枚は控えですのでそのまま持つていて下さい」

分厚い書類を渡される。

機密の規約、コンプライアンス、未成年者就労承諾書——ざつと見る限りそれらの細かい規約たちがたくさんだ。

持つてきていたスクールバツグに書類を入れる。

「では、少しレッスンを見学しましようか」

「是非お願ひします」

見てろよ見知らぬ記憶。

私はおまえなんかに絶対負けない。

決意も新たに、私は武内さん——武内プロデューサーの背を追つた。

#

レッスンスタジオ。

そう銘打たれた部屋は六階にあつた。

ここまで武内プロデューサーは無言。私も無言だ。

時折振り向いているのは優しさか、それとも左手首が気になるのか。  
結局包帯しか見せていない。中身はちよつと今朝方やらかしたばつかりなので見せ  
たくなかつたのもある。言われたら見せる気ではいるが。

「こちらです。篠原さん」

「はい。あ、本田さん——」

そこには真剣な表情で鏡を見ながら踊る少女が三人いた。

一人は本田さん。後の二人は長い黒髪のクールな人と、純朴な少女と言つた雰囲気の  
茶髪の人だ。

どちらも背中からお尻くらいまでの長さの髪がある。

私も同じくらいだ。差別化するなら、うなじで細くまとめていくくらいか。

とはいえる、さすがプロのヘアケア。艶も柔らかさもキューティクルも、見ただけで全  
然違うと理解する。

「来月から入る事になる予定の三期生です。少しレッスンを見させてもらつても？」

武内プロデューサーがトレーナーらしき人に声をかける。

視線。上から下まで。

それを尻目に、本田さんが二人を連れて近寄ってきた。

「こっちのクールなのが渋谷凜。こっちの可愛いのが島村卯月ね！」

「あ、はい。篠原夢見です。よろしくお願ひします」

簡単に紹介してもらい、名乗つて頭を下げる。

渋谷先輩が柔らかく笑い、よろしく、と返してくれ、島村先輩は快活によろしくお願ひします！ と返してくれる。

「あ、本田先輩——」

「うわあつ!?」

「なんですかその奇声」

「いや、夢見に先輩って呼ばれたら背筋がぞわつてしてさ。気持ち悪いから普通に未央でいいから

「分かりましたみーちゃん先輩」

「距離感が極端だ!? しかも先輩呼びは外さない頑固！」

「二人は知り合いみたいだね」

渋谷先輩が笑いながら会話に入ってくる。

島村先輩もだ。

「はい。学校では仲良くなさせてもらつてます。勉強に付き合つたり」

「あつ、未央ちゃんがたまに自慢してくる篠原メモの！」

「なんですかその極秘文書みたいな扱い」

「いやあ、つい」

「別に良いですけど……」

柏手が二つ。

トレーナーさんだ。

「休憩はそこまで。レッスンに戻るぞ！」

あとは壁際に寄り、武内プロデューサーと一緒に手拍子に合わせて動く三人を眺めるだけだ。

その表情は真剣で、しかし楽しそうでもある。

本田さんなんかはいつも以上に気合いを入れているのか、トレーナーさんに『普段からこうなら……』などと言われてバツの悪い顔をしていた。

十五分程だろうか。

あまり邪魔になつても悪いので、武内プロデューサーに連れられて部屋から出た。

「如何でしようか」

「凄かつたです」

「代表的な全体曲なんかは良く披露する機会があります。全てとは言ないので、いくつか目を通して下さい」

「わかりました」

「では、次は歌のレッスンの様子を見ようかと思いますが、一緒に来ますか？」

「お願ひします」

——次は十階の一室。

二つに仕切られていて、マイクとノイズフィルターがある部屋と機材とを分けていた。

機材側からのみ出入りは可能になつていて、マイクの部屋には少女が一人で歌つていた。

「一ノ瀬志希さんです」

「一時期話題になりましたね」

『天才科学者、アイドルに一躍転身！』などという見出しで良くニュースになつていた。

聞き流していくだけだから顔は知らなかつたが。

こちらに気付いたらしい一ノ瀬先輩は私を見て怪訝そうな顔を一瞬だけし、その後隣の武内プロデューサーを見て納得した顔になつた。

とりあえず頭は下げておく。  
手を軽く振る返礼を受けた。

「よし、お疲れ様でした」

どうやらレツスンはちようど終わるところだつたらしい。

男性のトレーナーがこちらを見て、『どうせならちよつと歌つてごらんよ』と言う。思わず武内プロデューサーを見れば、頷き。仕切りの向こうでにへら、と笑う一ノ瀬先輩が手招きをしている。入れば、ヘッドホンを渡されるついでに匂いを嗅がれた。

「?」

「おおー、不思議な匂い。男性的？　でも確かに女性の……ハスハス……んーー、いや、女性主体で残り香みたいな……彼氏？　ちよつとクセになるかもコレ」

「な、なにを？！　彼氏も居ません！」

「んー？　じやあ何だろうこの匂い。まあいつか。気にしなくていいよーん」  
いや気になるしめちやくちや恥ずかしい。

　　というかサラツととんでもない核心を突かれて青ざめる。

「んふふー、なんだか色々秘密がありそうだねえ？　解くのが楽しみ楽しみー」  
顔色を楽しんだのか、にんまりと笑つて部屋から出て行つてしまつた。

自由な人だ。

促され、マイクの前に立つ。

「え、と、じゃあ、アカペラですけど……」

これから歌う曲は、記憶に埋もれたものだ。

何度も聞いて、楽譜に起こせるほどになつた。

元は他人のものだし、それを自作と言い張るのは憚られるという罪悪感から私は遠慮がちにマイクに向かう。

「では——」

#

篠原さんが歌い出した瞬間、聞こえるはずのない伴奏が聞こえた。

ビリビリと肌が騒ぐ。

とんでもない完成度だ。

そして何より、

「——歌い慣れしてるね——」

「確かに。ただ、まだボイスレッスンは必要だし、改善の余地がある。ただ、歌に関して

は逸材というほかないのでしょう。良い拾い物をしたようですね。武内さん」

「正直、私もここまでとは思いませんでした」

そして気になるのは、聴いたことがない曲だという事。

もし自作であるなら、それを生かしたプロデュースが必要になるだろう。

私は頭の片隅に疑問を置いて歌声に意識を傾ける。

「んー、しかし、歌詞はあんまアイドル向けじゃないですね。メッセージ性が強過ぎる」

「心の何処かにある孤独に響く歌だよねー、これ。気に入っちゃった♪」

——欲しかつたのは共感だけ。

そう流れる歌声は確かにピアノの幻聴を伴つて、心の端にある孤独感を刺激して い  
た。

## 三話目 魔境です。

歌い終えた私を出迎えたのは武内プロデューサーとトレーナーさんだけだった。一ノ瀬先輩は私の歌を聴き終わるや否や、いざこかに電話をかけて部屋を出て行つたらしい。

少なくとも不快な様には思われていらないという事で、そこは素直に喜ぶべきか。

その後は流石に夜も遅く、危ないという事で武内プロデューサーに家まで送つてもらうことになつた。

なつたのだが――。

「夢見がアイドルですか……」

「はい。シンデレラプロジェクトをご存知ですか?」

両親と武内プロデューサーがガチの話し合いを開始した。

相手は数ある人種の中で論戦について一家言ある人種だぞ、大丈夫か武内プロデューサー。

ちなみに、私はちょっと口を挟んだら怒られたので離れた場所でソファに座り、テレビを見ている。

「ですから——」

「ではこの場合は——」

「はい。もちろん——」

「そもそも——」

……胃が痛くなつてきた。

マイルームに避難しよう。うん。

ほんとはいるべきなんだろうし、私も何か言うべきなんだろう。

だがこの針の筵みたいな雰囲気の場に居たくない……！ 無理！

ああ、でも。

「ママ。パパ。私、アイドルやつてみたい」

最低限の意思表示だけはしておこう。

#

次の日。土曜日である。

私は普通に美城ビルに足を運んでいた。

そもそも、両親は賛成派だつたらしく、説得というよりは解釈や意見のすり合わせに近かつたらしい。

捺印済の書類を持つて帰る武内プロデューサーを見送り、色々な事を話し合つた。

——結果。

「まさかの寮生活……まあ、確かに学校も職場も歩いていける距離になりますが……ビルの裏手に寮があるらしく、そこで生活することになりましたとさ。」

両親曰く、今から一人での生活に慣れるべき、という事だ。

まあ普通に土日は帰るつもりだし、学校が近いと考えればメリットだらけだ。  
周りには同年代の女の子だけで少し心配だが。  
いじめとか。

「あ、武内プロデューサー！ こちらです！」

湧き上がる不安を押し退けて現れた武内プロデューサーに手を振る。

急ぎ足で歩いてきた武内プロデューサーは挨拶もそそここに、胸ポケットから手帳を取り出し、挟んであつたものを一枚私に寄越した。

「カードキーですか？」

「はい。寮のものです。規則に関しては既に篠原さんの部屋に置かれていますので、そちらをご覧下さい」

「分かりました」

「すいませんが、制服はお持ちですか？」

「あ、はい。言われた通り持つてきました」

「社員証や、各局に入る入門証を作るのに写真を撮るので、着替えて頂けますか?」

「はい。じゃあ、ちょっとお待ち下さい」

「分かりました」

着替え、案内された先で写真を撮る。

後日寮に届くとの事で、それまでは仮入場書を受付で書いて入る事になるわけだが、これがまた面倒くさい。

名前、目的、アポ有りか無しかetc etc……。

出来るだけ早く来て欲しいとそれとなく武内プロデューサーに伝え、寮に案内してもらつた。

どうやら男性は中に入れない決まりがあるらしく、武内プロデューサーは玄関の外までしかついてきてもらえなかつた。超不安。逃げていい? ダメです。

「よーこそー!」

「ふぶつ!?

とりあえず寮母さんに挨拶をしよう、と談話室とプレートが掲げられた部屋に入る  
と、紙吹雪が顔面を強かに打つた。

テープもか。

「——あー……誰にや。新人ちゃんの顔面に撃ち込んだの」

「結構な人数でクラッカーを鳴らしたからねー。ちょっと分かんないなあ」

どうやら狙つて撃つた訳ではないらしい。

いきなり始まつたイジメではないと理解し、ええ、と、と猫耳力チューシャをつけた女の子に声をかける。

「あの……」

「はっ、ごめんにや！　まさか顔面に当たるとは思わなくて！　誰が撃ち込んだのかは分からぬいけど……！」

「いえ、大丈夫です。歓迎頂いてる様ですし」

ありがとうございます。と締めるといい子だにやあ！　と笑つてくれたので、とりあえず視線をほかの人に向ける。

黒髪短髪の女性がニコニコしながら近寄つてきた。

「はいー。よろしくお願ひしますね。私は鷹富士茄子。漢字ではナスと書きますが、かこですよー」

「あ、はい。私は篠原夢見といいます。よろしくお願ひしますね、鷹富士先輩」

「茄子でいいですよ？」

「えつ、と、はい。茄子先輩！」

「篠原さん、結構体育会系のノリなの？　あ、私は北条加蓮。よろしくー」

「芸能界は上下に厳しいとの事でしたので……」

「無表情なのは緊張かな?」

「ワイワイと次々に集まる先輩方にワタワタと対応する。していると――」

「……不思議な気を感じます――」

一番困るタイプの子が現れた。

依田芳乃と名乗ったこの子は、とてとてと身の回りを見て回り、目を合わせ、自己紹介以降の第一声がこれだつた。

長い髪を後ろで縛り、純粹無垢であり、しかしどこか遠くを見ているような瞳でこんなことを言われてしまつてすぐくドキドキした。

なんなんだこのプロダクション。

匂い嗅いだだけで、見て回つただけで私の秘密をストレートに見抜くとか。  
なんの魔窟だ。

「ふむー。呪われているわけでなくー、しかしついて離れぬ気配が――面妖でして――  
「氣のせいでは?」

「いえー、この気配は間違えようもないのですてー。茄子どのー」  
「はーい。私に靈感とか超能力――「エスパーですかッ?」――はありませんが……」

超能力というワードに超光速反応をした女の子がどこかに居てすぐ気になるが、茄子先輩の声が耳について離れない。

「——えいっ！」

「ふあつ」

いきなり手を握られ、痛みを感じない程度に優しく締められた。

「とりあえず当面は大丈夫だと思います。芳乃ちゃんなら分かりますよね？」  
「はいー。ありがとうございますー」

えつ、えつ、何をしたの？

えつ。

怖い。

「ああ、大丈夫だよ夢見。あの二人はそういう、悪意みたいななの対極にいるような存在だし」

「北条先輩……」

ポテト食べる？ と皿を渡されたので受け取る。

ライనナップはフライドポテト（塩）、フライドポテト（マヨ）、フライドポテト（ケチャップ）、フライドポテト（素）、フライドポテト（味噌）

「フライドポテトのバリエーションがすごいですね！」

「そつちにツツコむの?」

「え、だつて……先輩、私のために持つてきてくれたんですよね? 嬉しいです」

「待つて眩しい……!」

ある意味弄りがいがないなあ、などと苦笑いの北条先輩に何か間違えたかと冷や汗が

出る。

「そんな身構えなくていいって」

「分かりました」

他愛ない話をしたがすぐ癒やされた。

前二人が謎の迫力があつただけともいう。

「……あ、あの……」

「うひあつ!?」

圧倒されてポテトを口に詰めていると、背後から急に声をかけられた。

びっくりし、振り向くと金髪で、片目を隠した女の子がいる。

「あ、ご、ごめん、ね? でも、気になつたから……」

「ええと……?」

「篠原さん、だよね」

ぐぐつ、と顔が寄つてくる。

近い。

「あ、見えた」

え？ と思い、目を合わせるが、合わない。

この人、私の中の何かを見ている……！

ね……？

うん、顔、やつと見えた。私は白坂小梅。

よろしく、

拝啓母上。

このプロダクションは魔境です。

## 四話目 挨拶と太陽とホラー

さて、こうしてアイドルと学生の二足の草鞋を履くことになつたわけだが、初日はとりあえず各方面への挨拶回り。

頂いた名刺を渡すと皆驚いた顔で見られたが、何か不備があつただろうか。例えば、名刺を相手より下にしてなかつたとか。

帰りに武内プロデューサーに問い合わせれば、逆に熟練のサラリーマン並な渡し方をされた方向で驚かれていたという話だ。

少なくともマイナス印象にはなつていないので安心した。  
「ところで夢見さん。寮生活の方ですが……」

「はい。問題はありません。気付いたら誰かしら近くに居て、凄く助かっています」「皆さん良い方ばかりですからね」

「ええ」

ただちよつと離れた場所から小梅さんや芳乃さん、茄子さんの誰かが居るのが凄く不思議だが。

ちなみに今日もうつかり寝たがいつもの夢を見なかつた。

「隈も少し薄くなっていますし、眠れたようですね」

「疲れていたのかもしれません」

「ただ寝る寸前、ちょっと良い香りがいきなり漂ってきた気もするが。  
うまくやれそうで安心しました」

いやいやメンヘラが問題児みたいな扱いをされるのは不服である。  
いや問題児ではあるが、人を無闇矢鱈に傷付けたりはしない。

「大丈夫ですよ」

とはいえ、そんなことを言つてもなにも変わらない。

実際に今うまくいっているわけだし。

そう考えて短く答えたが、どうやら少し不服だつたらしい。

少し難しい顔をされた。

「眉間にしわが寄つてますよ」

「ああ、はい……」

ハツとした顔になつて眉間をもみほぐしている。

「さて、次はメンタルケアの部門です。夢見さんのカルテも先立つて頂いた承諾書の中  
に入っていますので、主治医との連携は取れていますよ」

「メンタルケア……ですか」

まあ、ある程度の規模や、精神を患いややすい職場には大抵いる。

なので不自然ではないが、少し苦手意識があつた。

「今日は面通しだけです。別に通う義務もありませんので、そう難しい顔はしないでください」

「……そんな顔してましたか私」

ええ、と間髪を入れない答え。

どうやら相当だつたようだ。

深呼吸を一回。一気に肩から力を抜いてリラックス。

「相當に苦手なようですね」

「以前相談させられた学校のメンタルケアの方がいわゆるハズレでして。肥大した思春期特有の自我の暴走——と断じられてしまつてから、です」

「なるほど」

まあ、理由が悪夢なので言われても仕方ないとは思うが、それでも当時の私には大きなショックだつた。

少し小馬鹿にされた様に感じたのも苦手意識を増長させる事に繋がつたのかも知れ

ない。

「とりあえず挨拶はします」

「はい」

腹は決めた。

多分利用には二の足は踏むだろうが、それでも同じ会社に所属するのだから知つていた方が良い。

案内された一室に入室。

お互に名前を言つて、それで終わり。

思つたよりあつさりだ。

人柄はいい人そだつたのですこし安心した。

#

さて、各方面への挨拶は恙なく終わり、自室に。  
荷解きと片付けをしていると、ノックが。

「はーい？」

ここでノックが出来るのはアイドルだけだ。  
だから安心して扉を開くが、

「こんにちはッ！　日野茜です！　よろしくお願ひします！」  
灼熱の太陽がそこにいた。

「こ、こんにちは」

「はい！ 先日は撮影のため、いませんでしたが！」

「あ、こちらこそ。篠原夢見です。よろしくお願ひします」

太陽のような笑み。

元気を擬人化したようなオーラ。

そこにいるのは小柄で明るい少女な筈なのに、その圧倒的な存在感と輝きに目を焼かれるかと思うほどの衝撃を感じる。

幸運の女神が二人に靈媒、天才とまあよくもこんなに恐ろしい程集めたなど言いたい位だつたが、認識が甘かつた。

集めたんじやなくてこれびっくり人間ホイホイなんだ。

人のことは言えないが。

逆にメンヘラ転生者とか個性薄い気しかしない。

「こちらお近付きにどうぞ！」

「わ、ご丁寧に……ああ、すみません玄関先で。お茶でも飲みませんか？」

「良いのですか？ 是非！」

何この子話してるだけでめちゃくちや元気出る……。

茜さん——日野さんと呼んだら是非名前で！ とぐいぐい来られた——はまさに

パツションが服を着て歩いている存在だ。つよい。

そこにあるだけであらゆる不淨を焼くが如く存在感。なるほど——これが、アイドル……！

何か盛大に勘違いしたような気がしてならないが、人を自らの輝きで照らし、人々に希望を与えるのが仕事なのだから間違つていないはずだ。

「ええつと……夢見さん？」

戸惑い顔の茜さんがこちらを見ている。

はて、何かしただろうか。

「、ああ、すみません。今何か持ってきます」

「え、あ、はい」

「？」

どうもさつきと様子が違うような？

いや今はとにかくお茶を出さねば。

お茶を出して少し。

いつの間にか自分を取り戻した茜さんと楽しく談笑し、部屋まで送る。

良い邂逅だった。

目指すべきアイドルの姿を少しつかめたのではないだろうか。

すこしワクワクしながら部屋に戻る。

木製の扉を開き、蝶番を軋ませながら内外の境界を繋いだ。

「いや、中々の出会いでした。あの明るくパワフルな存在感。正しく太陽の具現ですね」  
例えは自分にイマイチ自信が持てない。そんな話になつたとき、茜さんは暖かで圧倒するような存在感を放ち、大丈夫です！ 夢見さんはやれる人です！ と断言した。

それは良くある慰めのそれではなく、本心からなのだと目が物語ついて、根拠を遠回しに聞けば、彼女はこう言い切つたのだ。

「——苦労を知つてゐる人は輝く、ですか」

茜さん自身、何かあつたのだろう。

それはきっと深く、柔らかい部分の話になるのだろうから今は聞かないが、いつか話して貰えるような間柄になれたら、と思う。

というか、茜さんのおかげで把握したが、私の自傷癖、既に周知だった。

そりや誰かしらの視線感じるわ。納得。

ほ、と胸にわだかまる暖かいものを吐き出して暗くした部屋のベッドに腰掛ける。

そのまま身を預けるように横になれば、ああ、意識は遠くなつていく。

——あ、扉開けつ放しだ。鍵してないや。

そんな事を思いつつ、気付けば意識は闇に落ちていった。

#

暗闇の廊下。

一般的な企業ビルのそこを、歩く。いや、歩かされている。

自意識とは別。私ではない誰かが身体を操っている不快な感覚。

私は久しぶりに、悪夢を見ている。

ここまで明確に自我を持つた明晰夢は久しぶりだ。

しかし『私』は冷静なのに、『彼』の胸中は憤りで破裂しそうだ。

その不思議で不愉快な感覚は忘れられないだろう。

「くそ、俺はこんな\*\*\*\*\*だろ。\*\*\*\*\*め、\*\*\*\*\*！」

ところどころ聞き取れない苛立ちと怒りの声が私の口から溢れ出す。

声色は若い男のものだ。

「\*\*\*\*\*—————つ！」

叫びだ。怒りの、自己嫌惡の。

心を蝕む悪夢の叫びだ。

それは彼の口から出していく、

「、——。は、コホツ……」

現実の私からも出ていた。

喉が痛いが、それよりも。

この、私と彼との境界が曖昧なままにすることは出来ない。

まるで手慣れた——いや、正しく手慣れた動きで袖から腕を出した。

——ぎちぎちぎちぎち!!

机のベン立てに立てられたカツターナイフを一息で最大まで引き伸ばした独特な音が響く。

そしてそのまま、

「ま、待つて」

境界を引く  
自傷する寸前にナイフを持つ腕を摑まれた。

何事かと見やれば、

「白坂、さん……？」

「う、うん。ごめんね。すごい声がしたから……」

「そういえば、鍵をかけずに寝てしましましたね……」

「間に合って、良かつた」

心底からの言葉だ。

しかし、待つて欲しい。

「白坂さんの部屋は反対側の奥では……？」

「そ、そうだよ。あの子が教えてくれた、から……」

そういう白坂さんは誰も居ないはずの私の隣を見て笑みを浮かべた。  
思わず見るが、何も居ない。

すごい勢いで鳥肌が立つた。

「あ、あの、今、いるんです、か？」

「え？ う、うん」

何を当然な、とでも言いたげな表情だ。  
再び意識が遠のくのを感じた。